まんのう町内遺跡発掘調査報告書　第15集

金剛院経塚

平成29年度

2018年3月

まんのう町教育委員会

金剛院地区 遠景 東より

経塚S3 出土遺物

表紙：経塚 S3 遺物検出状況 西より

序　　文

まんのう町教育委員会では、地元にある文化財の保存と活用を目的に各種の調査を行ってきております。金剛院経塚のこれまでの調査につきましては、昭和 37 年に実施した発掘調査で陶製の経筒外容器などが出土し、町の資料館で保管展示しております。中寺廃寺跡より継続されている「まんのう町仏教関係遺跡群調査」の一環として、これまでの調査を補完すべく、平成 23 年度から本格的な調査を開始しております。

本年度は、第 1 テラス南半で 2 か所のトレンチ調査と、経塚 1 基の発掘調査を実施し、経塚に石室が残存していることが確認されました。内部からは土師質の経筒外容器 2 点と、経筒外容器として使用された瓦質土器甕 1 点が配置された状態で出土しました。経筒外容器の内部からは鉄製経筒と銅製経筒が出土しました。銅製経筒には経巻の一部と思われる和紙の痕跡を確認しました。蓋として置かれていた石材が移動されたものの、内部は抜き取られることがないまま風化が進んだものと思われ、埋経された時の状態を観察することができました。

今回の調査でも多くの成果と課題が出ており、今後の調査を企画実施するために大いに活用しなければならないと考えております。

このたび、多くの方々の御高配と御尽力により、『まんのう町内遺跡発掘調査報告書第 15 集　金剛院経塚　平成 29 年度』を発刊する運びとなりました。本報告書が研究資料として広く活用されますとともに、文化財に対する理解と関心が一層深められることになれば幸いです。

最後になりましたが、本発掘調査に格別の御指導と御協力を頂きました関係の皆様方に心から感謝申し上げますとともに、今後とも宜しく御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成 30 年 3 月

まんのう町教育委員会

教育長　三　原　一　夫

例　　言

1. 本報告書は、まんのう町教育委員会が、文化庁の文化財補助金を受けて平成 29 年度国庫補助事業として実施した、香川県仲多度郡まんのう町炭所東 1686-1 他に所在する金剛院経塚発掘調査の報告を収録した。

2. 発掘調査及び報告書の作成は、まんのう町教育委員会が実施した。

3. 発掘調査及び報告書の作成にあたって、以下の方々のご教示、また関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。(順不同、敬称略)
   片桐孝浩、上里八重子、大山裕矢、香川県教育委員会生涯学習・文化財課、
   金剛寺檀家の皆様

4. 本報告書で用いる方位の北は、旧国土座標第Ⅳ系の北であり、標高は T.P. を基準としている。

5. 挿図の一部に、国土地理院長の承認及び助言を得て同院所管の測量標及び測量成果を使用して得た平成 20 年 3 月測図まんのう町 1:2,500 地形図を縮小編集したまんのう町全図（1:10,000、承認番号 平 19 四公 第 4 号）を使用した。

6. 「Ⅱ. 周知と活用」については金剛院経塚に限らず、当教育委員会生涯学習課文化財室における普及・啓発活動全般について報告している。

7. 本報告に当たって、土器実測・トレースを株式会社四航コンサルタントに業務委託した。

目　　次

Ⅰ．金剛院経塚・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
１．立地と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
（１）地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
（２）歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
２．調査の経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
（１）調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
（２）調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
３．調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
（１）遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
（２）遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
（３）まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
４．総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
Ⅱ．周知と活用・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第２図　平坦地分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第３図　金剛院経塚全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第４図　第１テラス 経塚検出状況平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第５図　第１テラス トレンチ３・４土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第６図　経塚 S3 遺物検出状況平面図・立面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第７図　経塚 S3 完掘状況平面図・見通し断面図・遺物出土位置模式図・・・・・・・・・12
第８図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第９図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第10図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

表　　目　　次

遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

写 真 図 版 目 次

巻頭図版　金剛院地区 遠景 東より

経塚 S3 出土遺物

図版 1　金剛寺と金華山(金剛院経塚) 全景 南より

経塚 S3 掘削前状況 遠景 南西より

図版 2　経塚 S3 掘削前状況 西より

経塚 S3 掘削前状況 南より

図版 3　経塚 S3 掘削前状況 東より

経塚 S3 掘削前状況 北西より

図版 4　トレンチ 3 東壁北半土層断面 西より

トレンチ 3 東壁南半土層断面 南西より

図版 5　トレンチ 4 北壁西半土層断面 1/2 南西より

トレンチ 4 北壁西半土層断面 2/2 南西より

図版 6　トレンチ 4 北壁東半土層断面 南より

経塚 S3 遺物検出状況 西より

図版 7　経塚 S3 遺物検出状況 南西より

経塚 S3 遺物検出状況 東より

図版 8　経塚 S3 遺物検出状況 北西より

経塚 S3 銅製経筒出土状況 西より

図版 9　経塚 S3 経筒外容器 検出状況 西より

経塚 S3 経筒外容器 検出状況 南西より

図版 10　経塚 S3 完掘状況 西より

経塚 S3 完掘状況 石室東壁 西より

図版 11　経塚 S3 完掘状況 南より

経塚 S3 完掘状況 石室北壁 南より

図版 12　経塚 S3 完掘状況 東より

経塚 S3 完掘状況 北より

図版 13　経塚 S3 完掘状況 石室南壁 北より

経塚 S3 底石 検出状況 西より

図版 14　経塚 S3 底石 検出状況 南より

経塚 S3 底石 検出状況 北より

図版 15　報文番号 4・5

図版 16　報文番号 6・7

図版 17　報文番号 9・10

図版 18　報文番号 1・2・3・8・11・12・13・14

Ⅰ．金剛院経塚

１．立地と環境

（１）地理的環境

まんのう町は、平成 18 年 3 月 20 日に香川県仲多度郡南部の 3 町(琴南町、満濃町、仲南町)が合併して誕生した町である。香川県中部(中讃)に位置し、東は綾川町・高松市、西は三豊市、北は丸亀市・善通寺市・琴平町、南は徳島県美馬市・三好市・東みよし町に接している。町の面積は 194.45 ㎢、人口は約 1 万 9 千人である。町の南部及び南西部には、標高 1,000m を超える香川県第 1 峰竜王山(1059.9m)、第 2 峰大川山(1042.9m)を擁する讃岐山脈が連なり、その麓を県下で唯一の一級河川である土器川が北流している。

金剛院経塚のある炭所東金剛院地区は、土器川右岸の鷹丸山・猫山・小高見峰に囲まれた狭隘な谷部に開けた大柞川沿いに位置する。金剛院地区は山間部にありながら、阿弥陀越や法師越といった峠道により交通の便は良く、古来より峠を介しての往来が盛んな地域であった。金剛院地区の谷部のほぼ中央に金華山と呼ばれる標高約 207m の小山があり、その南側斜面に石仏山金剛寺が、山頂部に経塚群が所在する。

（２）歴史的環境

まんのう町内には時代、種類とも様々な文化財が散在しているが、中でも古代から中世にかけての重要な仏教関係遺跡が所在することが特徴である。これらの仏教関係遺跡は①白鳳・奈良期の古代寺院である弘安寺廃寺、佐岡寺跡、②平安時代の山林寺院である国指定史跡中寺廃寺跡、③平安時代後期から中世の山林寺院である尾背廃寺跡、④平安時代後期の経塚群が所在する金剛院経塚、⑤弘法大師空海との関係が深い満濃池、神野神社、神野寺、以上の 5 つの地区に分けられる。中寺廃寺跡と満濃池を除きこれらは詳細な調査が行われていないが、これまでの断片的な調査から見えてくるものは、白鳳・奈良期の古代寺院→平安時代の古代山林寺院→平安時代後期～中世の山林寺院、経塚群という変遷の可能性と、これらが約 10 ㎞の範囲内に所在することである。これらは相互に関係した可能性が高く、古代から中世にかけて華開いたであろう仏教文化を物語る貴重な文化財といえる。

２．調査の経緯と経過

（１）調査に至る経緯

金剛院地区では平安時代末期から鎌倉時代に繁栄した大規模な寺院が存在したとの伝

まんのう町
金剛寺・金剛院経塚
金剛院
小高見峰
467
△467.7
△246.7
348.3△
·379
鷹丸山
△387.4
△454.2
北山
長尾
町代
天神
樫林
·179
林ノ下
△139.9
片岡
長炭小学校
炭所
·226
161.9△
·210
·211
·232
炭所東
△274.2
平山
種子
大谷川
0
1:25,000
1km

第１図　遺跡位置図

承が語り継がれてきた。弘法大師空海が高野山開基以前、全国各地に清浄な聖域を求めて大寺院を建立しようとしていたころ、この地にその建立を試みたという話が伝えられ、金剛院という地区名や地区内に多く残る仏縁地名もそれによって生まれたといわれている。現在の金剛寺は明治期に再興されたものである。金剛寺の由来を記した古文書は一切が焼失したとされ現在まで確認されておらず、金剛寺門前に建立された十三重の石塔(鎌倉時代後期)のみが歴史を物語る資料であった。

再興直後より金剛寺裏の金華山において露出した集石群が確認され、瓦や土器などの遺物が採集され始めた。そこで昭和 37 年、地元有志を中心とした金剛院経塚の発掘調査が行われた。当時の記録によると陶製経筒外容器 5 点が埋納された経塚 1 基を完掘し、陶製経筒外容器 1 点が埋納された経塚 1 基を半掘したとある。調査時に出土した遺物は、調査以外で採集された遺物とともに金剛寺で保管されていた。現在、保存状態の良い鉄製経筒 1 点、陶製経筒外容器 9 点、陶製経筒外容器蓋 9 点、銅鏡 1 点がまんのう町の有形文化財に指定され、未指定の遺物も含め町へ寄託されている。

まんのう町では町内の仏教関係遺跡群を将来へ受け継ぐ大切な文化財として、保護し活用を図ることを目的に「まんのう町仏教関係遺跡群調査事業」を展開している。その一環として、平成 15 年度から 25 年度までは、国指定史跡中寺廃寺跡の調査及び保存整備を実施してきた。平成 23 年度からは、まんのう町炭所東字金剛院の石仏山金剛寺裏山に位置する「金剛院経塚」の調査に着手している。

（２）調査の経過

平成 23 年度、金華山中腹第 2 テラスのトレンチ調査を実施し、山側を切土し谷側に盛土した平坦面造成の痕跡を確認した。平坦面上で柱穴、土坑、排水溝を確認したが、いずれも時期は特定できなかった。平成 23 年 10 月から平成 24 年 4 月にかけて、平成 22 年に町の有形文化財に指定された金剛寺十三重塔周囲の発掘調査を行った。塔は建立された鎌倉時代後半より大きく位置を変えず、現在に至ることを確認した。また塔西沿いには参道の存在を確認した。平成 24 年度、第 1 テラス南半の地形測量及び、経塚群の分布状況を確認するための精査を行い、標高差約 3.5m の間に 16 群の石群が存在することを確認した。平成 26 年度、さらに第 1 テラス南半の精査を進め、経塚群検出状況の記録を行った。精査の際に、推定地点を含め 12 か所の経筒抜き取り痕を確認した。平成 27 年度、第 1 テラス南半において、経塚 1 基の掘削調査を行い主体部に石室を持つ構造であることを確認した。

T.N.
奥佐古
金芝
小原
大畑
華空蔵
板屋
第1テラス
第2テラス
金剛院経塚
金剛寺十三重塔
胡摩畑
大向
柏ノ佐古
南谷
別当
藤尾
石ヶ谷
大柞
0
1:6,250
500m

第 2 図　平坦地分布図

本年度の発掘調査は平成 29 年 10 月 25 日から平成 30 年 1 月 15 日まで、まんのう町教育委員会が行った。発掘調査終了後に報告書編集作業を行った。

３．調査の成果

（１）遺構

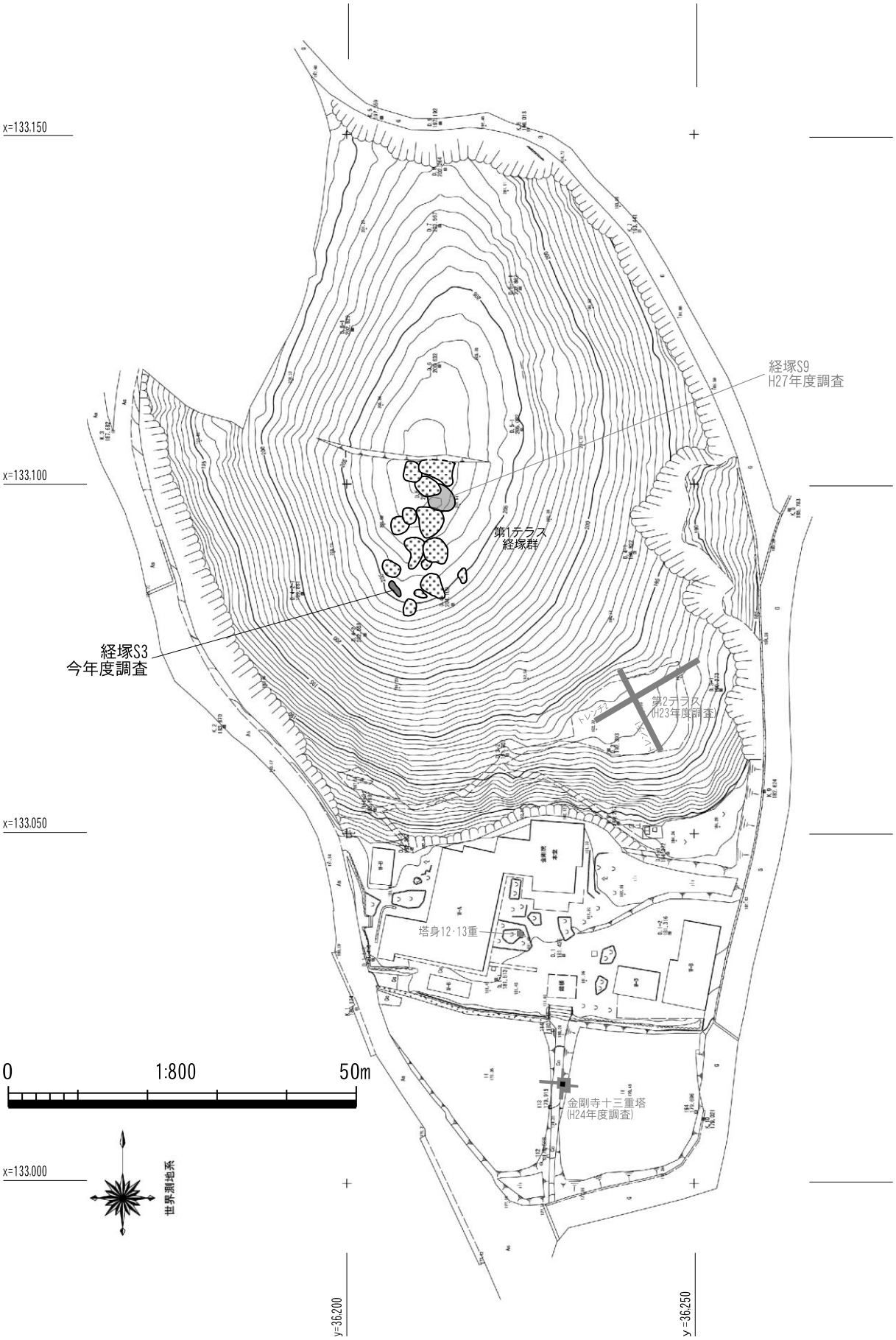
本年度は第 1 テラス南半において、トレンチ 3・4、経塚 S3 の掘削調査を行った。第 1 テラスは金剛寺裏山の金華山山頂部にあたり、標高 207.6m、テラスの南北約 50m、東西約 26m、外周約 127m、面積約 1,032 ㎡である。山頂部全体にテラスが広がるが、頂上から北半は近年の耕作地造成によって削平されており、経塚群も現地表面では確認できない。調査を実施した南半は、面積 423.37 ㎡である。現地表面は、金剛寺建造物の建て替え・修繕用に植林された樹齢 60～80 年のヒノキと、自然発生した雑木に覆われ、それらの根が這う隙間に、経塚を構成していたとみられる直径 10～60cm の石が散乱している。平成 24 年度の調査で地形測量を行い、標高差 3.5m の間で散乱する石が概ね 16 群にまとまることを確認した。この 16 群の中には、ある 1 群から転落もしくは除去されて、もう 1 群を形成した個体も存在する。平成 26 年度の調査で、散乱した石群の上面に積もった落ち葉、腐葉土を除去し検出した状態を平面実測した。平成 27 年度の調査で、経塚 S9 が直径 1m、深さ 27cm、上下 1～2 段に積まれた石室を持つ構造であることを確認した。

<u>トレンチ 3</u>

経塚 S3 の傾斜に直交する標高 206.40m から 204.27m にかけて、西から東へ 5.37m、幅 0.35m で設定した。土層序は主に現代の堆積土層（腐葉土層）、経塚が埋没した層（腐植土層）、流土層（粗砂質土層）、基盤層（しまり強い粗砂質土層）から成る。現代の堆積土層を除き地山と同じ傾斜で堆積している。経塚 S3 は調査開始時に上面を覆っていた石材が失われた状態で検出したが、それらの過去に移動されたであろう石材の一部は第 2 層に埋没している。第 1 層内で見られる石材は、その後の植林等の様々な要因でさらなる移動をしたものと考えられる。トレンチ内では経塚 S3 以外の遺構は確認されなかった。遺物も出土しなかった。

<u>トレンチ 4</u>

トレンチ 3 に直交する標高 205.48m から 204.96m にかけて、北から南へ 3.05m、幅 0.35m で設定した。土層序は主に現代の堆積土層（腐葉土層）、経塚が埋没した層（腐植土層）、流



第 3 図 金剛院経塚全体図

第４図 第１テラス 経塚検出状況平面図

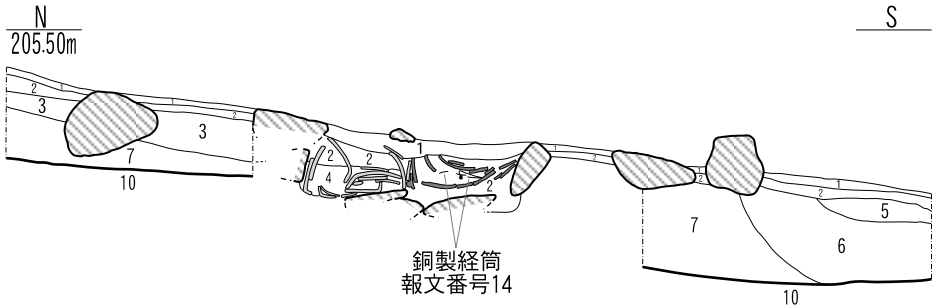
土層(粗砂質土層)、基盤層(しまり強い粗砂質土層)から成る。トレンチ南寄りで土質の異なる流土層(しまりのそれほど強くない砂質土層)を2層確認した。各層はトレンチ南寄りの流土層を除き基盤層と同じ傾斜で堆積している。トレンチ4においても上面を覆っていた石材が移動させられ第2層に埋没している。トレンチ内では経塚S3以外の遺構は確認されなかった。遺物も出土しなかった。

経塚S3

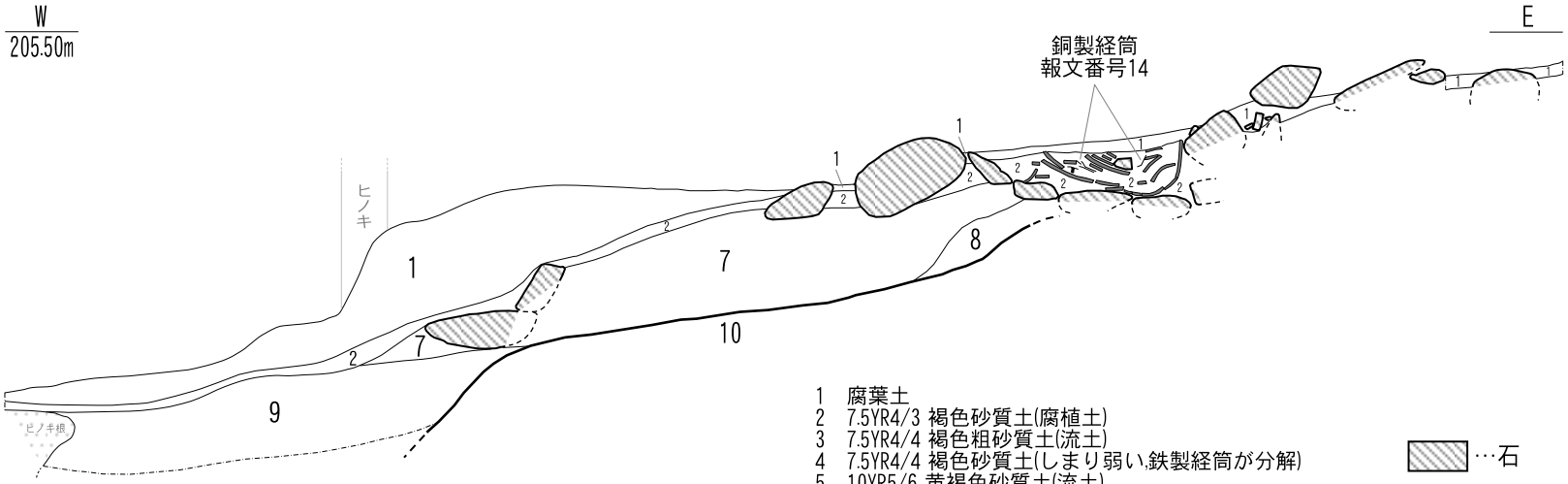
経塚S3は第1テラスに広がる経塚群の南西端に位置し、経塚S3を構成していたと思われる10㎝～40㎝の砂岩の石材を標高205.00mから205.25m付近に、北西から南東に4.5mの細長くまとまって確認した。石材群の頂点は標高205.53mで、今回、調査を行った経筒抜き取り痕の南東際に、地表面から約50cmの高さで不規則、不安定な状態で積み上げられている。これらの石材は経筒抜き取りの際に撹乱を受けて経塚造営時の位置より移動され、現在のまとまりになったとみられる。今調査の経筒抜き取り痕は、これより2.5m東にも経筒抜き取り痕と推定される窪みを確認していることから、経塚S3を構成していたと思われる石材は経塚1基のものではなく2基分の石材の可能性もある。また、今調査の経筒抜き取り痕は、平成26年度の経塚分布範囲の検出調査時に、経筒外容器の一部が地表面に露出していた部分である。平成27年度の精査で外容器が埋納されたままの状態で残存していることが推定され、造営当初の遺構を残す可能性が高いことから確認調査を行った。出土した土器はいずれも上面を覆っていた石材等の蓋が移動させられた後、長い期間、露出した状態に晒されたと思われ、底部は位置を変えず、上部が内側へ折れ込むように損傷を受けている。昭和37年の調査で開けられた経塚2基の遺物はすべて完形であることから、造営時に積まれた石材の重みによる損傷ではないと考える。

上部を覆っていた転落石材と他所から移動してきたとみられる石材を除去し、腐葉土層、腐植土層を掘削した結果、平面の形状は長さ40㎝～50㎝、幅20㎝～30㎝の方柱状の石材の小口面で内側が円形状を呈するように配列されていた。方柱状の石材で造られた配列全体の直径は約1.4mで、内側の円形状を呈した内径は約0.59mを測り、円柱状の石室となっている。この時点で内側に経塚外容器と思われる土器片を多数検出した。その土器片を慎重に調査した結果、円形状を呈した内部の北半東西に土師質の経筒外容器2点、南半に経筒外容器に転用された瓦質の甕1点を、いずれも壁面に密着するように配置された状態で検出した。ここでは便宜的に北半西側の経筒外容器を外容器A、東側の経筒外容器を外容

トレンチ3



トレンチ4

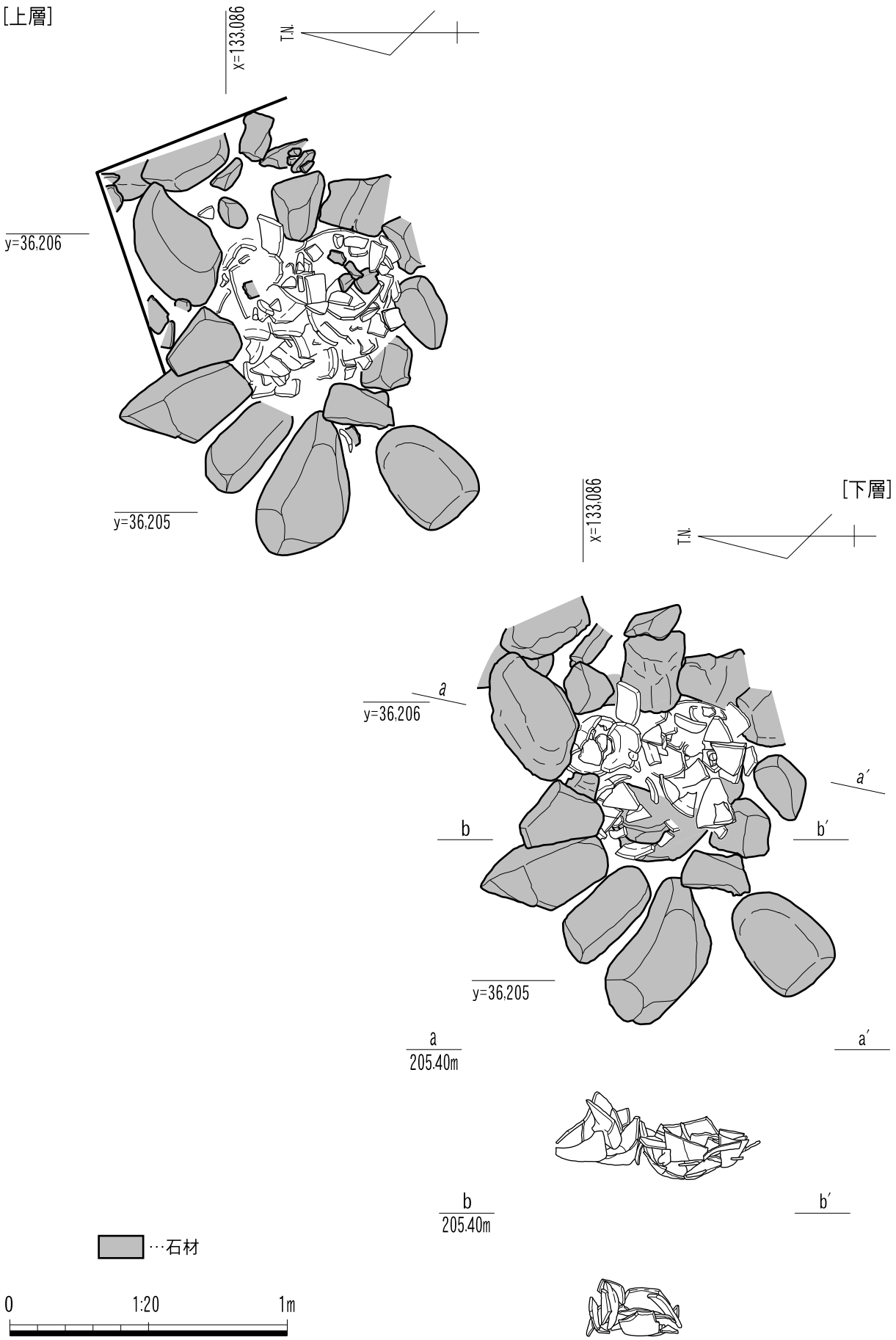


1　腐葉土
2　7.5YR4/3 褐色砂質土(腐植土)
3　7.5YR4/4 褐色粗砂質土(流土)
4　7.5YR4/4 褐色砂質土(しまり弱い,鉄製経筒が分解)
5　10YR5/6 黄褐色砂質土(流土)
6　2.5YR5/3 黄褐色粗砂質土(流土)
7　2.5YR6/4 にぶい黄色粗砂質土(流土)
8　7.5YR5/6 明褐色粗砂質土(流土)
9　7.5YR4/3 褐色粗砂質土(流土,しまり強い)
10　10YR6/4 にぶい黄橙色粗砂質土(しまり強い,基盤層)

…石
…報文番号6・7
…報文番号9・10

0　1:50　2m

第5図 第1テラス トレンチ3・4 土層断面図



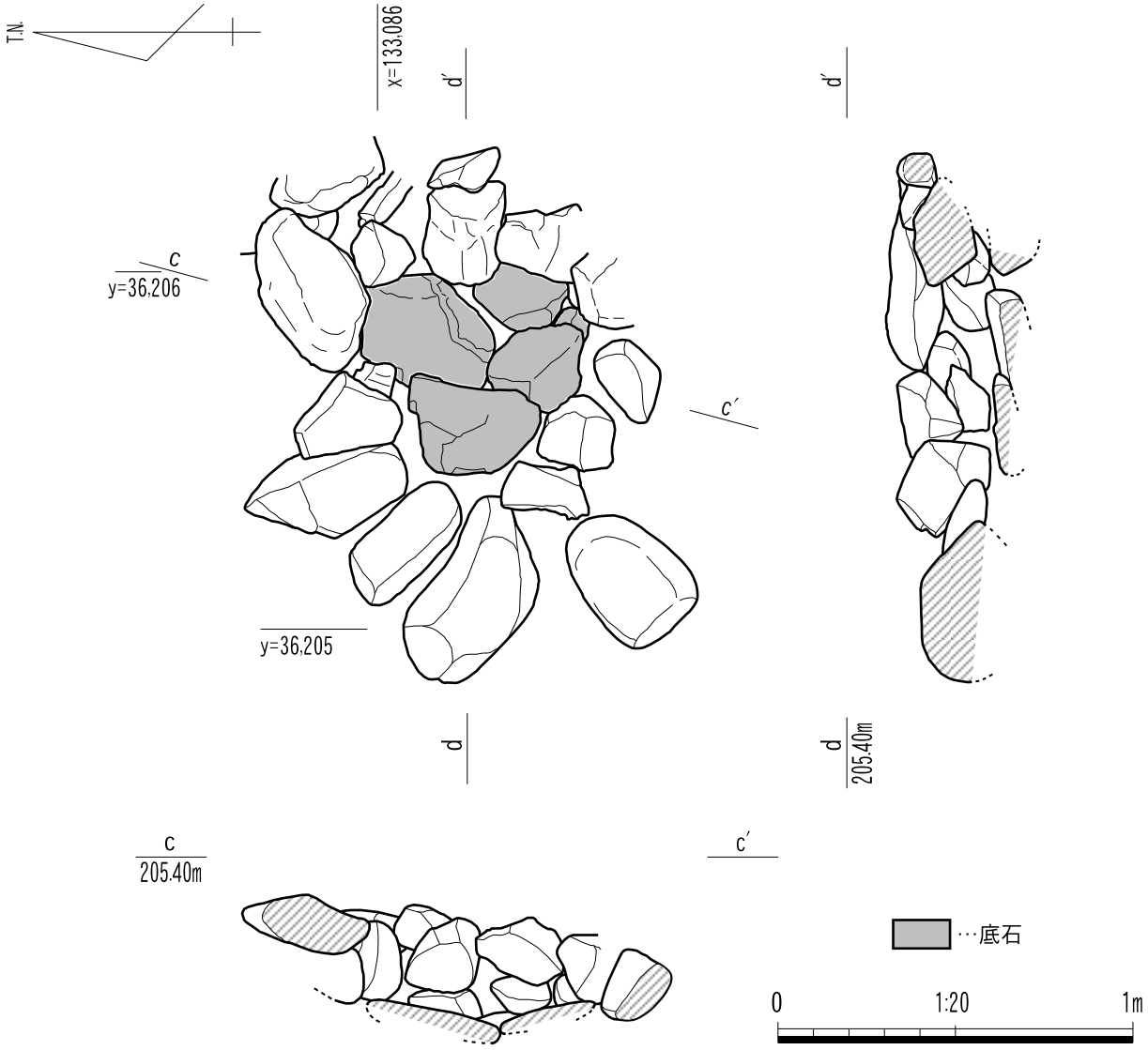
第 6 図 経塚 S3 遺物検出状況平面図・立面図

器 B、南半の経筒外容器を外容器 C とする。

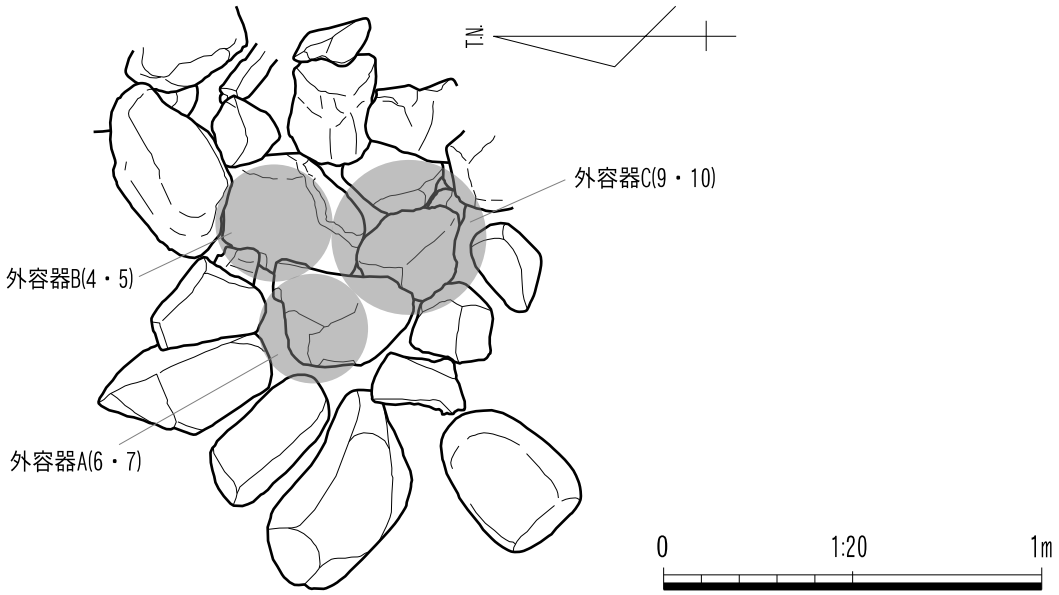
須恵器椀(1)は取り上げを外容器A→C→Bの順で進めたが、最後の外容器Bの取り上げ後、外容器 B が接していた石室東壁上段の石材間より出土した。鉄釘(2)は腐葉土層除去直後、腐植土上層より出土した。鉄釘(3)は外容器 A の取り上げ作業中に、南外面が接する外容器 C との間の、石室底石近くで出土した。外容器 A(6・7)は、掘削前より口縁部の一部が露出していた。上面の埋土を取り除くと、蓋及び口縁部の破片が内側に折れるように転落した状態で出土した。体部は北が石室北面に、東が外容器 B に、南が外容器 C に接していた。外容器 A 内部に落ち込んだ破片を取り上げていくと、外容器の半分から底部にかけて、鉄製経筒が酸化し分解したと思われる褐色砂質土が約 15cm 堆積し、その層中から鉄製経筒蓋小片が出土した。底部は石室底石に接しており、中央部が円形に割れていたものの原形の位置を保ち円形に並んだ状態で検出した。外容器 B(4・5)は、掘削前の上面からは確認されていなかった。外容器 A と同じく、上面の埋土を取り除くと、蓋及び口縁部の破片が内側に折れるように転落した状態で出土した。体部は北と東が石室北東面に、南が外容器 C に、西が外容器 A に接していた。外容器の破片を取り上げていくと、容器の半分から底部にかけて、外容器 A と同じ褐色砂質土が約 20cm 堆積し、その層中から鈕部分が残存する鉄製経筒蓋片(8)が出土した。底部は石室底石に接しており、放射状に割れていたものの原形の位置を保ち円形に並んだ状態で検出した。外容器 C(9・10)は、甕上部の破片が折り重なるように埋没しており、上部が西、底部が東の横向きに転倒した状態で検出した。外容器内部に落ち込んだ破片を取り除くと甕の内部から銅製経筒(13・14)が出土した。銅製経筒はほぼ 1 個体分が押しつぶされたような状態で検出し、内面には微量の和紙の付着を確認した。銅製経筒については平成 24 年度の精査時に経塚 S3 上で、別の個体の蓋から体部にかけての破片(11・12)を表採しており、今回出土した遺物の中に底部が含まれていると考えられる。

これらの遺物が出土した石列の内側が主体部である経筒の埋納穴であり、石室を構築していたとみられる。石室は、緩斜面に開けられた円柱状の土坑の側壁と底面が石材で補強され、開口部は傾斜に沿う形で、底面は水平に構築されている。石室の深さは 15～30cm、側壁は直径約 15～55cm の石材が、東半山側で上下 2 段に積まれ、西半谷側で 1 段に配列された状態で残存しており、ほぼ垂直に立っている。しかし北側直近に自然発生したとみられる雑木の成長に伴い、東半山側の上 1 段は北東から南西にややずれた痕跡が確認できる。底石は直径約 23～44cm の石材 4 石が水平に敷き詰められた状態で検出した。経塚 S3 の石

[完掘状況平面図・見通し断面図]



[遺物出土位置模式図]



第 7 図 経塚 S3 完掘状況平面図・見通し断面図・遺物出土位置模式図

室南東横には石室を構築している石材と類似するサイズの石材が多数存在することから、石室を構築した後、上面に蓋をし、さらにその周囲を盛石したのではないかと考えられる。石室に使用されている石材はすべて、第1テラスに最も多く分布している砂岩である。経塚S3の石室は腐植土層直下より自然堆積した流土層を掘り込むように造られている。石室内の埋没土は第2層(灰褐色細砂質土、腐植土)である。

寺の関係者の話によると昭和37年の調査後、第1テラスにおいて確認できるすべての経塚について遺物の取り上げが試みられたらしく、その際に経塚S3についても上面を覆っていた石材が移動させられたが、何らかの理由で遺物の取り上げは行われないまま現在に至ったのではないかと推測される。ただ経塚には一般的に法具などの副納品が共に埋納されているが、今回の調査で出土しなかったことから、それ以前に開けられ傷みの少ない金属製品が持ち出された可能性も否めない。

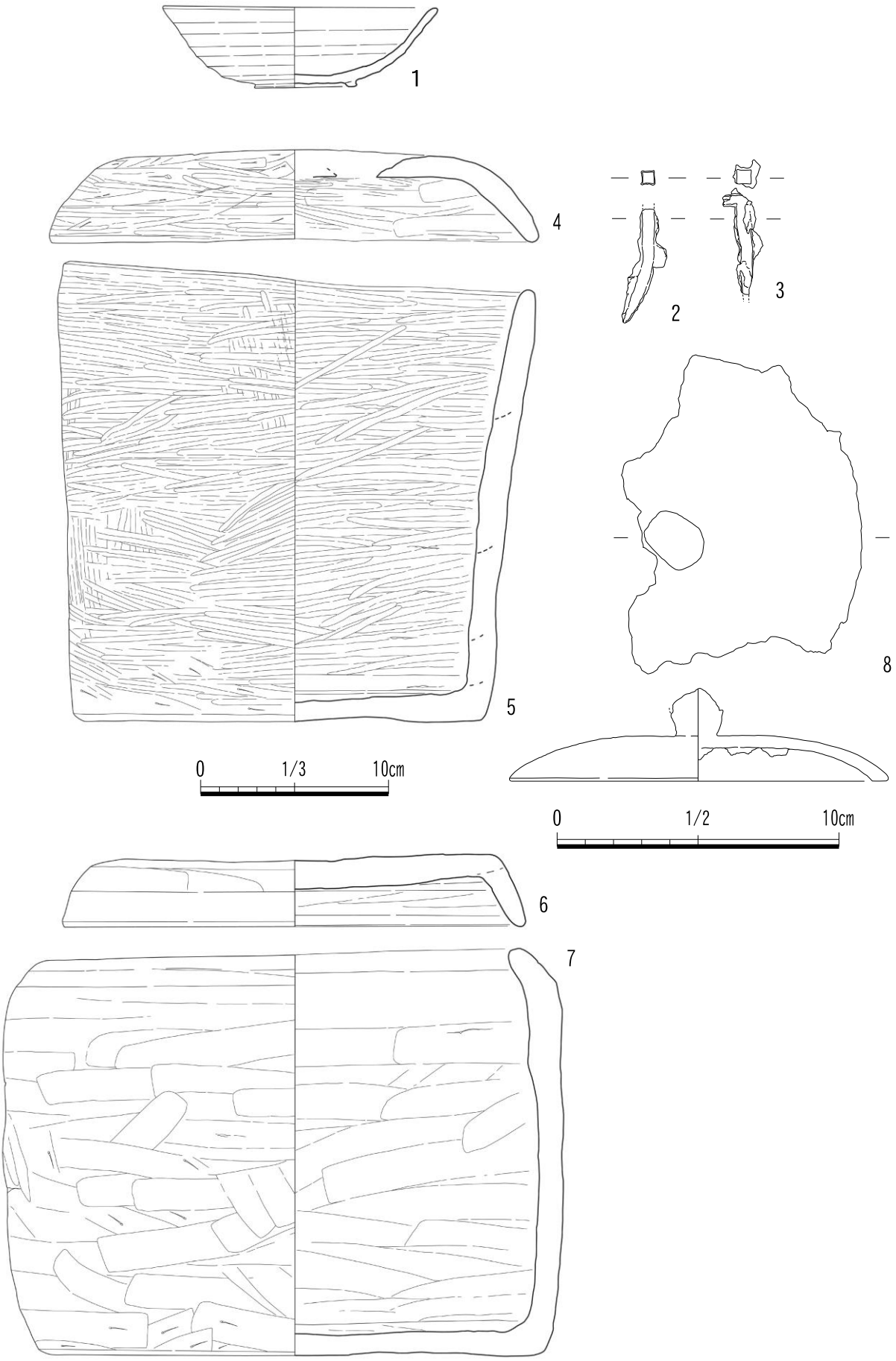
（２）遺物

1は腐植土中、石室内の東側の壁際で出土した須恵器椀である。底部に長方形の断面がつぶれたような高台が付き、体部は内湾気味に外上方に延び、直線的に口縁部に至る。口縁部はやや外反し、丸く収める。口縁部に重ね焼きの痕が認められる。体部外面はシャープな回転横なでが施され、明瞭な稜線が認められる。体部内面は回転横なでの後、回転横なでによる凹凸を消すように横なでが施されている。経筒外容器外から出土していることから、供献土器と考えられる。時期については12世紀末～13世紀初めと考えられる。

2は腐植土中から出土した鉄製釘である。断面は方形で、一辺4㎜を測る。

3は外容器Aと外容器Cの間から出土した鉄製釘である。頭部を直角に曲げている。断面は方形で、一辺5㎜を測る。

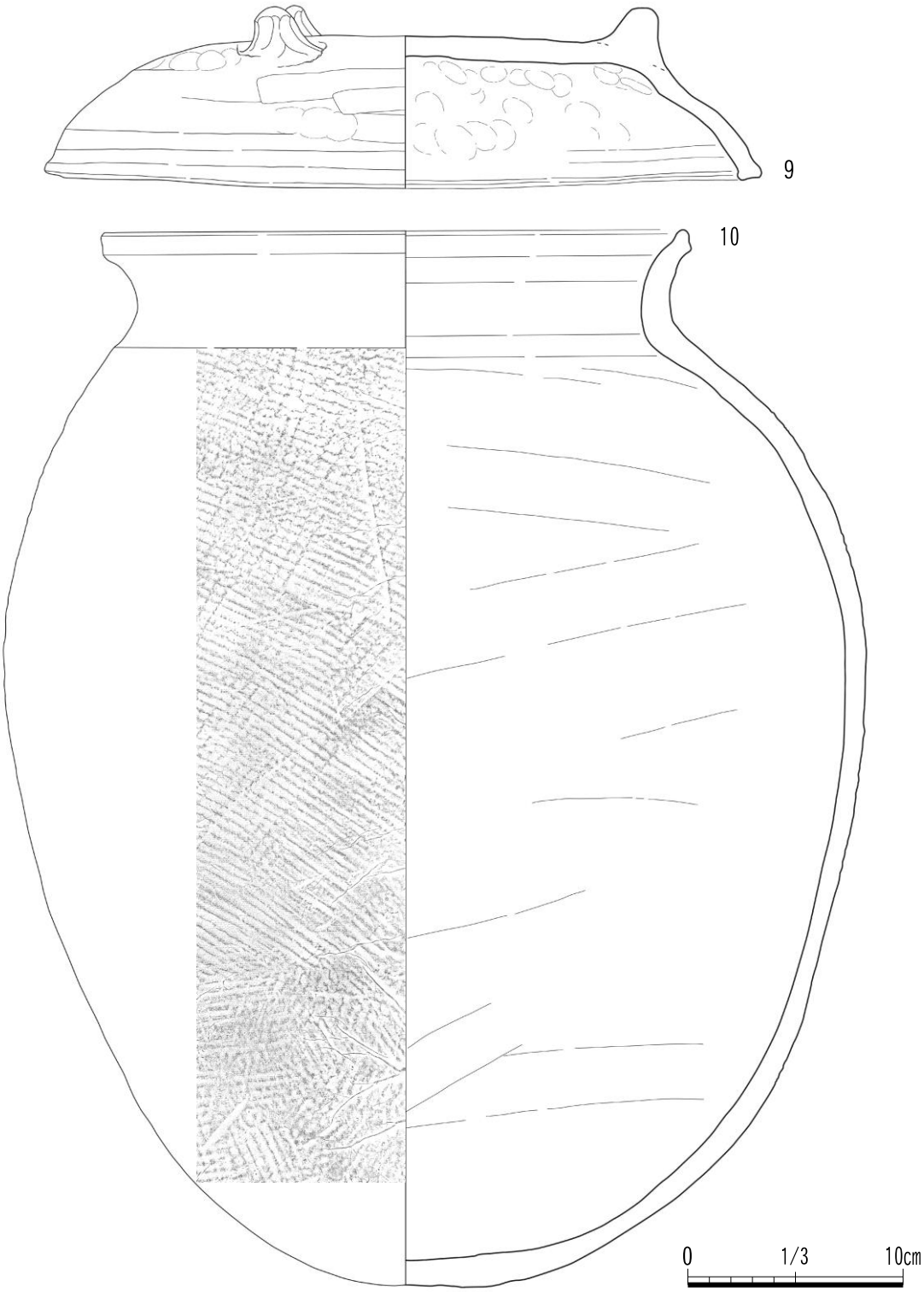
4・5は土師質の経筒外容器Bの蓋4と身5である。出土状況から蓋4と身5が組み合うものと考えられ、また体部に施されているヘラ磨きなどの調整からもセットであることが解る。蓋4は天井部が平坦で、体部は直線的に外方向に延び、口縁端部は丸く収める。ほぼ中央部が破損していることからつまみが付いていたかは不明である。また、天井部に内面側の径で2㎝を測る、内面側から開けられた穿孔が認められる。体部内外面に横方向の太いヘラ磨きが施されている。身5は底部が平底で、体部はやや外反しながら上方に延び、口縁端部は丸く終わらせる。体部内外面には横方向のヘラ磨きが密に施され、部分的に粘土紐の接合痕が確認できる。体部外面の最下端には斜め方向のヘラ削りが認められ、ヘラ



第 8 図 出土遺物実測図

削りの後、ヘラ磨きが施されていることが解る。底部外面は未調整で、底面内面には丸い錆の痕跡が 4 か所確認できる。身 5 の中からは錆びた鉄片が出土しており、底部内面の錆の痕跡から、鉄製の経筒が納められていたものと考えられる。

6・7 は土師質の経筒外容器 A の蓋 6 と身 7 である。出土状況から蓋 6 と身 7 が組み合う



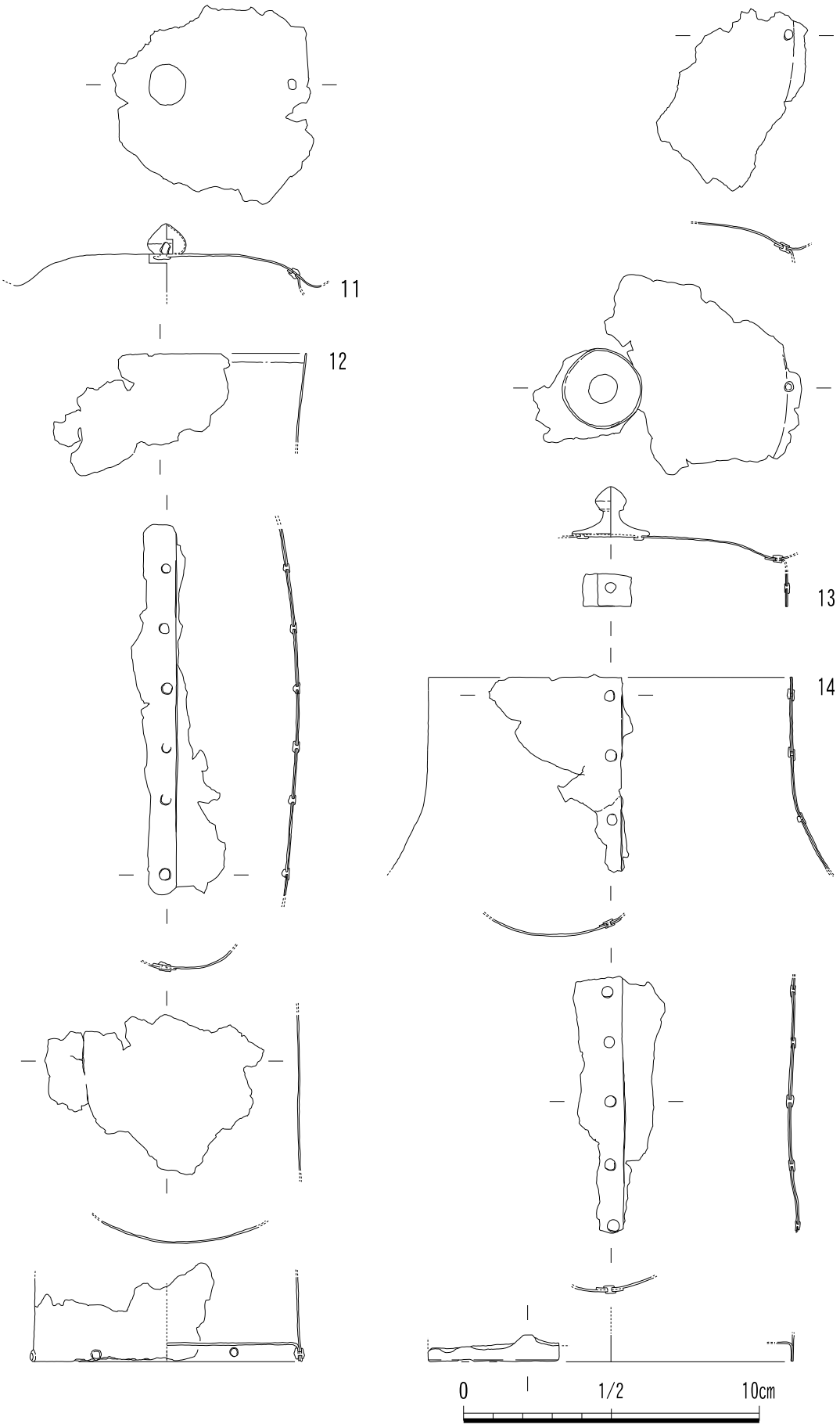
第 9 図 出土遺物実測図

ものと考えられ、また体部に施されている板なでなどの調整からもセットであることが解る。蓋 6 は天井部が平坦で、体部は直線的に外方向に延び、口縁端部は丸く収める。体部内外面に横方向の板なでが施され、天井部は外面が指なで、内面は板なでが施されている。身 7 は底部が平底で、体部はほぼ直線的に上方に延び、口縁部を内方に屈曲させ、口縁端部は丸く終わらせる。体部内外面には横方向の板なでが施される。体部外面の最下端には斜め方向のヘラ削りが認められ、板なでの後ヘラ削りが施されていることが解る。底部外面は未調整で、底面内面には僅かに錆の痕跡が確認できる。身 7 の中からは錆びた鉄製の蓋が出土しており、鉄製の経筒が納められていたものと考えられる。

8 は外容器 5 から出土した鉄製の経筒蓋で、天井部中央に最大径約 2 ㎝のつまみが付く。天井部は内湾気味に下方に延び、口縁端部は下部に 5 ㎜程度の平坦部を持つように終わらせる。内径で直径 12.3 ㎝を測ることから、経筒身の直径は約 11～12 ㎝と考えられる。

9・10 は瓦質の経筒外容器 C の蓋 9 と身 10 で、出土状況から蓋 9 と身 10 が組み合うものと考えられる。蓋 9 は天井部が平坦で、体部は内湾気味に外方向に延び、口縁端部は内外に僅かにつまみ出し、下端に平坦部を持ち方形に終わらせる。天井部から体部への屈曲部には 3 か所のつまみ状の突起が付く。おそらく三足付き瓦質の盤を転用し、外容器身 10 の蓋にしたものと考えられる。天井部、体部外面には指頭痕の後、横なでが施され、内面には指頭痕が顕著に認められる。身 10 は底部が丸底で、体部は卵型を呈し、口縁部は外反しながら外上方に延び、口縁端部は上方につまみ出す。底部外面は不定方向の、体部外面には右下がりの 5 ㎜角の格子目叩きが施されている。内面には横方向の指なでが施されている。瓦質の甕を経筒外容器に転用したものと考えられる。

11・12 は銅製の経筒の蓋 11 と身 12 である。経筒外容器身 10 の内部から出土した経筒身 12 の底部を除く、蓋 11 や身 12 の体部や口縁部は腐葉土から出土したものであるが、蓋 11 の口縁部径と身 12 の底径がほぼ一致することから、この蓋 11 と身 12 は組み合うものと考えられる。蓋 11 は天井部が平坦で、中央部に宝珠のつまみが付く。天井部から体部へは内湾しながら下方に延び、口縁部を上方に反らしている。宝珠は体部最大径以下に縦方向に切り込みを入れ、切り込み部を重ね合わすことにより宝珠下部を整え、蓋天井部に開けた穴に差し込み、内側で潰すことにより天井部と宝珠を接合している。蓋の体部内面には身口縁部と重なり合う口縁部が付いていた痕跡が確認できる。蓋の口縁部の高さは不明であるが、横長い長方形の銅板を丸め、接合することにより口縁部を作り、その口縁部から上方に延びる幅 7 ㎜、高さ 4 ㎜の銅板を天井部内面に接合させ、重なり部分に穿孔し、



第 10 図 出土遺物実測図

銅線を差し込み、内外を潰すことによって接合している。この蓋 11 も完形ではないため、天井部と口縁部の接合部が何か所あったかは不明である。推定の口縁部径は約 9.0 ㎝である。身 12 は 5 ㎜の上げ底を呈し、円形の底板と高さは不明であるが銅板を丸く錨止めした体部を下端 5 ㎜部分で推定 6 ヶ所錨止めして底部と体部を接合している。体部は 2 ㎝間隔で錨止めされ、筒状を呈し、口縁部は銅板の縁部そのままに終わらせている。身 12 の口縁部内側には、内面に 3 ㎜ほどの重なり合った痕跡が認められ、蓋 11 の口縁部との重なりが考えられ、蓋 11 の口縁が身 12 の口縁の内側に差し込まれるようになっていたものと考えられる。

13・14 は銅製の経筒の蓋 13 と身 14 である。これらは経筒外容器身 10 の内部から出土したもので、蓋 13 の口縁部径と身 14 の底径がほぼ一致することから、この蓋 13 と身 14 は組み合うものと考えられる。蓋 13 は天井部が平坦で、中央部に宝珠のつまみが付く。天井部から体部へは内湾しながら下方に延び、口縁部を上方に反らしている。宝珠は裾の広がる形態で、広がった円盤状の下部に 2 ヶ所の突起を持ち、天井部に開けられた穴に差し込み、内面を潰すことにより天井部と宝珠を接合している。蓋の体部内面には身口縁部と重なり合う口縁部が付いていた痕跡が確認できる。蓋の口縁部の高さは約 1.1 ㎝の横長い長方形の銅板を丸め、7 ㎜重ね合わせ錨止めすることにより口縁部を作り、その口縁部から上方に延びる幅 8 ㎜、高さ 4 ㎜の銅板を天井部内面に接合させ、重なり部分に穿孔し、

土器

報文番号	挿図番号	図版番号	種別・器種	遺構名	出土層位	法量(cm)			残存量	胎土	色調		調整		備考
						口径	底径	器高			外面	内面	外面	内面	
1	8	18	須恵器・椀	経塚S3	－	14.3	5.3	4.3	6/8	砂粒中砂～細砂少	7.5YR5/4にぶい褐	10YR6/4にぶい黄橙	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	貼り付け高台
4	8	15	土師質土器・経筒外容器蓋	経塚S3	2層	26.0	17.5	5.1	7/8	砂粒粗砂少	10YR7/6明黄褐	10YR7/6明黄褐	ヘラ削り後ヘラ磨き	ナデ後ヘラ磨き	穿孔あり
5	8	15	土師質土器・経筒外容器	経塚S3	2層	24.0	20.9	24.2	7/8	砂粒粗砂～細砂並	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	ナデ・ヘラ磨き、ヘラ削り後ヘラ磨き	ナデ・ヘラ磨き	
6	8	16	土師質土器・経筒外容器蓋	経塚S3	2層	24.7	21.0	3.8	6/8	砂粒粗砂～中砂少	10YR6/4にぶい黄橙	7.5YR5/3にぶい褐	板ナデ・ナデ	板ナデ・ナデ	
7	8	16	土師質土器・経筒外容器	経塚S3	2層	25.1	25.7	21.6	7/8	砂粒粗砂少	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	ナデ・板ナデ後ヘラ削り	ナデ・ヘラ磨き	
9	9	17	瓦質土器・三足付盤	経塚S3	2層	32.7	―	8.3	6/8	砂粒細砂多	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	ナデ・指おさえ後ナデ	ナデ・指おさえ後ナデ	経筒外容器蓋に転用
10	9	17	瓦質土器・甕	経塚S3	2層	26.7	―	49.1	7/8	砂粒粗砂～細砂少	N4/灰	N4/灰	格子叩き・ナデ	ナデ	経筒外容器に転用

金属器

報文番号	挿図番号	図版番号	種別・器種	遺構名	出土層位	法量(cm)			残存量	材質	色調		備考
						残存長	最大幅	最大厚			外面	内面	
2	8	18	鉄製釘	経塚S3	2層上層	4.2	0.4	0.4	7/8	鉄	7.5YR3/4暗褐	5YR2/4極暗赤褐	
3	8	18	鉄製釘	経塚S3	2層	5.0	0.5	0.5	7/8	鉄	5YR3/4暗赤褐	5YR2/4極暗赤褐	

報文番号	挿図番号	図版番号	種別・器種	遺構名	出土層位	法量(cm)			残存量	材質	色調		備考
						口径	底径	器高			外面	内面	
8	8	18	鉄製経筒蓋	経塚S3(報7内)	4層	13.4	―	3.3	4/8	鉄	7.5YR3/3暗褐	7.5YR3/3暗褐	
11	10	18	銅製経筒蓋	経塚S3	表採	―	―	―	3/8	銅	緑色	緑色	宝珠型鈕
12	10	18	銅製経筒	経塚S3	表採	9.8	9.2	―	2/8	銅	緑色	緑色	
13	10	18	銅製経筒蓋	経塚S3(報10内)	2層	12.0	―	―	3/8	銅	緑色	緑色	宝珠型鈕
14	10	18	銅製経筒	経塚S3(報10内)	2層	12.2	12.0	―	2/8	銅	緑色	緑色	

遺物観察表

銅線を差し込み内外を潰すことによって接合している。この蓋 13 も完形ではないため天井部と口縁部の接合部が何か所あったかは不明である。推定の口縁部径は約 12.0 ㎝である。身 14 は 6 ㎜の上げ底を呈し、円形の底板と高さは不明であるが銅板を丸く錨止めした体部を下端 6 ㎜部分で錨止めして底部と体部を接合している。体部は経筒身 12 と同様に、端を 1cm 重ね 2cm 間隔で錨止めされ、筒状を呈し、口縁部は銅板の縁部そのままに終わらせている。身 14 と蓋 13 の口縁部との重なりは不明で、蓋 13 の口縁が身 14 の口縁の内側に差し込まれるようになっていたものか、外側になっていたのかは不明である。

（３）まとめ

今回の調査は、平成 27 年度に続き経塚内部の発掘調査を行い、遺物の残存状況が良好であったことから、経塚 S3 の埋納時の状態を観察することができた。さらに出土した銅製経筒の内側に経巻の痕跡と思われる微量の和紙の付着を確認したことから、経塚の種類としては紙本経経塚であると考えられる。経塚 S3 の石室構造は、平成 27 年度に調査を行った経塚 S9 の石室、また昭和 37 年に調査された経塚の石室と類似している。また昭和 37 年調査時の出土遺物、これまでに採集された遺物、町寄託遺物についても形状等の類似点が多数あり、第 1 テラスには多くの紙本経経塚が造営されたと言えるだろう。

４．総括

金剛院経塚は昭和 37 年 9 月、当時香川県文化財保護協会会員であった草薙金四郎氏により最初の調査が行われた。当時の調査では 2 基検出し、その内の 1 基より陶製経筒外容器 7 点、鉄製経筒 2 点、和鏡 1 点が出土した。もう 1 基は陶製経筒外容器 1 点を確認したが完掘はせず調査を終えている。その後、金剛寺関係者の聞き取りによると、視認できるほとんどの経塚で遺物の抜き取りが行われ、出土した遺物は本堂で保管していたとのことである。この時の調査地は、現在ではすでに不明となっている。

近年の確認調査は平成 23 年度より開始し、平成 25、28 年度を除き、平成 29 年度まで継続的に実施してきた。平成 23 年度は、経塚が広がる金華山頂上の第 1 テラスより 15m 下に位置する第 2 テラスのトレンチ調査を行った。柱穴 3 基、土坑 1 基、排水溝 1 条を検出し、磨滅した平瓦 1 点が出土した。時期は不明であるが山側を切土し谷側に盛土した平坦面造成の痕跡があり、テラスとしての利用があったことを確認した。平成 23 年 10 月から平成 24 年 4 月にかけて、町有形文化財指定金剛寺十三重塔の周囲の発掘調査を行った。

金剛寺が金華山南面に造営された際、十三重塔付近の尾根も削平されたと推定され、両側が石材で縁取られた参道を整備し、参道東側には盛土を敷き塔が建立されたことを確認した。遺物は 12 世紀後半～17 世紀までの瓦、土師器等 107 点が出土した。参道と塔は地上げにより埋没しているが、鎌倉時代後半より大きく位置を変えず、現在に至ることが分かった。平成 24 年度は、経塚の分布する第 1 テラス南半の地形測量を行い、等高線の間隔に不自然な部分も認めつつも、経塚の分布の規則性等については見出せなかった。さらに、全体の精査を行い石材群が、埋納物の抜き取り時に移動で形成された群もあると考えられるが、凡そ 16 群存在することを確認した。平成 26 年度は、現在の経塚の状態を残すため、全体の検出状況の記録を行い、12 か所の埋納物抜き取り痕を推定した。平成 27 年度は、経塚 S9 の調査を行い、主体部に石室を持つ構造であることが判明し、さらにその下で別の経塚を確認した。本年度は、経塚 S3 の調査を行い、石室に経筒外容器 3 点が配置された埋納時の状態を検出し、和紙の付着した銅製経筒が出土したことから、紙本経経塚であることを裏付けた。本年度をもって、一旦、金剛院経塚の確認調査を終了することとする。

隣の善通寺市では、善通寺の西側直近に位置する香色山山頂で、当初から意図された二階建て構造を持つ経塚が確認されている。まず下段に経筒が埋納され、数十年後、再び経塚が開かれ上段に埋納されたと推測されている。奈良の金峯山では、藤原師道が経塚造営の先駆者である曾祖父道長を参考に経筒埋納を行っている。経塚を造営する際、もちろん信仰する宗派の作法に則ったと考えられるが、合わせて先人、特に近親者を真似て埋経の手順が進んで行ったのではないかと想像する。石仏山金剛寺は、伝承ではあるが、弘法大師空海が大寺院を建立するための清浄な聖域を求めて、当地に造営が試みられたとされる。金華山はその金剛寺の本堂と密接した真北に位置する。金華山山頂という限られた空間に連綿と造営を繰り返し、山肌が見えないほど埋め尽くすこととなった経塚群からは、この地を聖域として崇め、代々埋経という習俗を受け継いでいった人々の厚い信仰を窺うことができるのではないだろうか。

<u>参考文献</u>

草薙金四郎／昭和 38 年／金剛院の経塚発掘について／文化財協会報特別第 6 集／香川県文化財保護協会

保坂三郎・三宅敏之・兜木正亨／昭和 52 年／新版仏教考古学講座 第 6 巻 Ⅲ経塚 Ⅳ特論／雄山閣

杉山洋／平成 6 年／浄土への祈り／雄山閣

善通寺市文化財保護協会／平成 8 年／香色山山頂遺跡群調査報告書

Ⅱ．周知と活用

本町教育委員会生涯学習課文化財室では町内文化財の周知と活用を図るため、出前授業、外部団体からの依頼による講師派遣、町民講座開設、貴重遺物特別展示、県との共催展示、講演会開催、外部団体との共催現地見学、琴南ふるさと資料館と旧仲南北小学校民具展示室の常設展示、パンフレット類の作成・配布、まんのう町文化祭と琴南地区文化祭での文化財関連の展示、他団体の発行物への寄稿等を行っている。

活動実績

実施日	行事名	参加者数
H28.3.5	仲南公民館 体験学習「勾玉作り」	24
H28.3.19	仲南公民館 体験学習「モザイク玉作り」	23
H28.3.21	ことなみ振興公社 春のふるさとウォーク「中通・造田地区の文化財見学」	55
H28.3.27	文化財町民講座「まんのう町の城跡入門」	90
H28.5.7	町婦人連絡協議会 講演「まんのう町の文化財」	70
H28.5.28	ことなみ振興公社共催 歴史探訪「中熊地区の文化財見学」	19
H28.6.12	一般団体 中寺廃寺跡見学	7
H28.6.18	文化財町民講座「綾子踊」	53
H28.6.27	町老人会連合会仲南支部研修「丸山城跡見学」	47
H28.8.16	四条公民館 体験学習「モザイク玉作り」	26
H28.9.7	中央女性大学「加茂神社見学と綾子踊解説」	79
H28.9.10	合併10周年記念特別講演会 谷一尚氏「安造田東三号墳出土モザイク玉とその周辺」	146
H28.10.2	ことなみ振興公社共催 歴史探訪「大川山」	20
H28.11.12	合併10周年記念　中寺廃寺跡ハイキング	19
H29.1.30	仲南小学校3年生 民具展示室見学	35
H29.3.20	琴南イベント協会 ふるさとウォーク 造田～中通	50
H29.3.26	文化財町民講座「戦国武将生駒正親と讃岐の城」	103
H29.5.15	琴平町立榎井小学校3年生 民具展示室見学	21
H29.5.20	満濃池森林公園満喫ウォーク 満濃池周辺遺跡解説	125
H29.5.21	ことなみ振興公社共催 歴史探訪「平家伝説の里 横畑を訪ねて」	23
H29.5.22	高篠公民館 体験学習「モザイク玉作り」	21
H29.5.31	一般団体 民具展示室見学	20
H29.6.25	文化財町民講座「大川念仏踊」	37
H29.7.2	仲多度郡スポーツ推進委員連絡協議会 三頭峠ハイキング	27
H29.7.7	四条小学校3年生 民具展示室見学	30
H29.7.10	満濃池フォトコンテスト	47
H29.8.8	吉野公民館 みよしの探訪「民具展示室・琴南ふるさと資料館見学」	23
H29.9.1	一般団体 民具展示室見学	16
H29.9.13	中央女性大学「満濃地区の文化財見学」	65
H29.9.18	ことなみ振興公社共催 歴史探訪「葛籠野」	21
H29.9.19	満濃南小学校5年生 体験学習 火起こし	31
H29.10.12	満濃南小学校5年生 宿泊学習 火起こし	31
H29.12.2	一般団体 中寺廃寺跡見学	15
H30.1.25	満濃南小学校3年生 民具展示室見学	40
H30.1.29	仲南小学校3年生 民具展示室見学	36
H30.1.31	長炭小学校3年生 地域の遺跡見学	17

※平成27年度末からの未報告分を含む

平成 28 年度はまんのう町合併 10 周年にあたり、記念事業として古代ガラス研究の第一人者、谷一尚氏をお招きし、安造田東三号墳出土モザイク玉に関する講演と、中寺廃寺跡ハイキングを実施し、大変好評を得た。また平成 27 年度よりスタートした文化財町民講座については認知度も上がり、年度末の回では参加者が 100 名を超えた。

本年度は旧仲南北小学校の民具展示室をリニューアルし、5 月にオープンすることができた。それまで民具に関しては小学生の学習に役立つレベルの展示がなされていなかったため、多くの小学校が町外へ見学に出ており、整備の必要性が高まっていた。リニューアルオープンにより町内外の小学校に学習利用されることとなり、また公民館行事などで見学の機会が設けられ、多数の高齢者に訪れていただき好評を得ている。夏から秋にかけては、本町にて 11 月に開催された全国育樹祭による満濃池への関心の高まりに合わせ「満濃池フォトコンテスト」を開催した。中寺廃寺跡の現地見学者に関しては、梅雨明けより 11 月末まで、推定で 1 カ月に 30～40 人の来訪があると考えられ微増している。今後も子どもの郷土愛を育む活動や、住民の地域活性化への活動に貢献できる内容を目指していきたい。

活動の様子

H28.9.10　合併10周年記念特別講演会
谷一尚氏「安造田東三号墳出土モザイク玉とその周辺」

H28.11.12
合併10周年記念 中寺廃寺跡ハイキング

H29.5.22
高篠公民館 体験学習「モザイク玉作り」

H30.1.25
満濃南小学校3年生 民具展示室見学